

# 戦後思想と丸山真男—近代論の文脈から—

佐藤 瑠 威

## (1) 戦後思想史における丸山真男

戦後日本の思想世界において、丸山真男は学者あるいは知識人としてはもっとも大きな影響をあたえた人の一人であった。96年の彼の死後も多数の丸山論が書かれている状況は、丸山がたんに敗戦後という過ぎ去った特殊な時代の思想家であったというだけでなく、依然として今日でも検討されるべき現代の思想家であることを示している。日本政治思想史というどちらかといえば「地味な」学問領域を研究していた丸山が、専門領域や学界の範囲を越えてジャーナリズムを通して広く知られるようになった原因は、丸山が政治学者としてそして知識人として敗戦後の十数年間、時代の問題について積極的に発言し、そして彼の鋭い分析と主張が広範な反響をよんだことにある。彼が取り上げた問題は、超国家主義、軍国主義、ファシズム、天皇制、ナショナリズム、スターリニズム、民主主義、平和の問題など現代政治の主要な問題の大部分に及んでいる。丸山が取り上げた問題の多様さに比例するように、丸山論の視角も一様ではなく、さまざまな視角から丸山の思想と学問は論じられている。筆者も十数年前から丸山の思想と学問の検討を試みてきているが、筆者のこれまでの丸山論の主題は二つ、すなわち彼の近代および近代精神論の特質と、丸山の思考を貫いている批判精神の特質を究明することであった。ここでは、現代の思想と学問の主要なテーマの一つである近代論の文脈の中に丸山の近代

論において、その特質を考えてみたい。

## (2) 学問的思想的テーマとしての近代論

二十世紀、特にその後半の世界を特徴づけるものは、とりわけ資本主義圏と社会主義圏の対立であり、それは政治的軍事的な対立になるとともに、思想の世界においても激しいイデオロギーの対立を生んだ。戦後の思想世界において、社会主義イデオロギーと資本主義あるいは自由主義イデオロギーとの対立は、もっとも主要な対立軸をなしてきた。しかし、戦後日本の思想世界においては、社会主義あるいは共産主義思想対自由主義あるいは反共思想という対立軸とは別に、西欧の近代あるいは一般に近代的なるものをどう評価するかという問題が重要な争点をなしていた。いわば学問的思想的テーマとしての近代論というものが存在した。そして資本主義対社会主義というイデオロギーの対立が既存の社会主義体制の崩壊と冷戦構造の終焉によって思想的なテーマとしてのリアリティを大幅に失ってしまった後においても、近代論は（「近代主義」からポスト・モダン思想へと主役を交代させつつも）依然として現代の重要な思想的学問的テーマでありつづけている。その意味において、戦後思想史を近代をめぐる論争史という視点から考察することもできる。

西欧近代あるいは一般に近代的なるものとの見え方と評価の仕方にかんしては実に多様な見方が存在する。しかも近代の評価について正反

対の立場があるというだけではなく、近代に対して肯定的なものも否定的なものも、それぞれ全く異なった価値観からの肯定や否定の思想が存在するのである。近代について批判的否定的な思想について言えば、その代表的なものとして(1)戦時中の「近代の超克論」、(2)戦後のマルクス主義、(3)現代のポスト・モダン思想をあげることができるが、これら三者の思想は相互にきわめて異なるというよりもむしろ対立する考えをもつものである。また近代に対して肯定的な立場にたつものを代表するものとして、(1)産業化的近代化論、そして丸山がその代表的存在とみなされていた(2)戦後の「近代主義」をあげることができるが、この両者もその思想的核心において全く異なる考えにたつものであった。そこで、これらの多様な近代論のなかで戦後の「近代主義」の特質をなすものは何であり、そして「近代主義者」とよばれた人々のなかでの丸山の近代論の特質をなすものは何かを考えてみたい。

### (3) 戦後日本の「近代主義」

敗戦後の日本に「近代主義者」とよばれた一群の知識人が存在し、一つの重要な思想的潮流となっていたことは、たとえば日高六郎の編集した「現代日本思想大系34・近代主義」をみても明らかである。この本の中で日高は、「近代主義者」に共通のものとして「日本の近代化とその性格そのものにたいする強い関心」と「制度的変革としての近代化だけではなく、その変革をになう主体としての、いわゆる近代的人間確立の問題にたいする強い関心である」<sup>(1)</sup>と定義し、丸山、大塚久雄、清水幾太郎、桑原武夫、川島武宜、加藤周一、都留重人の諸氏の文章をこの本に収録している。編者の日高もまた「近代主義者」の一人とみることができる。

敗戦後の日本にほとんど同時に同じような問題意識や関心や志向性をもった人々が多数あらわれたことには理由がある。理由の一つは、丸山が『日本政治思想史研究』の英語版の序文でふれているように、戦時中の日本の思潮を支配した近代の超克論への強い批判意識<sup>(2)</sup>であり、そしてより根本的な理由は、彼らのほとんどが直接体験することになったあの戦争期の日本の国家と社会と人間のありかたに根本から変革し克服しなければならぬ病理や問題を感じ取ったということにある。彼らはそこに広い意味での日本の前近代性を見出したのであり、それを変革するためには徹底した近代化が必要であると考えたのである。彼らに共通するこのような問題意識は、彼らの近代や近代化についての考え方を深く規定するものとなっている。

### (4) 丸山における〈近代〉

戦時中の近代の超克論から現代のポスト・モダン思想にいたるまで多種多様で相互に対立する近代論があらわれてきたが、それらの相異や対立はつまるところそれぞれの近代観の相異に帰着する。戦時中の近代の超克論において近代とは西欧の近代を意味し、またルネサンスを起源としつつもとりわけ十九世紀以後の機械文明、物質文明としての西欧の文明を意味していた。マルクス主義にとって近代とは、何よりも産業革命以後、十九世紀以後の資本主義体制を意味していた。それは西欧の近代を起源としつつも世界に広がり世界を支配していく体制であった。これに対して「近代主義」は近代の特質をなすものを人間と社会のありかたに求め、そしてそれをとりわけ宗教改革以後、すなわち十六世紀以後から十八世紀の啓蒙主義にいたる近代の形成期の時代に焦点をおいて把握しようとした。「近代主義者」がひとしく近代的人

間の特質としたのは人格的に自立した主体的個人であり、そして近代社会の特質としたのは自由平等の個人によって構成される民主主義を原理とする社会であった。

「近代主義」を特徴づけるものは、西欧の近代に形成された人間と社会、とりわけ近代的人間のありかたを重視し、この近代的人間を確立することを戦後日本の最大の課題と考えたことにある。そして丸山真男の思想と学問を特徴づけるものも、とりわけ近代的人間の特質をもっとも深く把握し鮮やかに提示してみせたところにある。笹倉秀夫氏は、丸山の近代的人間像を「内面的な自立に立脚した社会的な主体」<sup>(3)</sup>という言葉で表現した。すなわち、丸山の近代的人間像の特質をなすものは、それが内面的に自立した人格であると同時に社会的あるいは政治的な主体性をもった人間であるということにある。ただ近代精神の特質を内面的人格的自立と社会的主体性の両面を兼ねそなえていることにみる点においては、丸山と他の「近代主義者」、たとえば大塚久雄との間に本質的な相違は存在しない。両者ともに、近代精神の特質を超越的普遍的原理を内面化した自立的人格であると同時に、社会に対して積極的に働きかけていく能動的行動的な人格であることにみている。大塚と丸山との相違—すなわち丸山に独自の近代的人間像—は、近代精神の特質をその精神構造と同時に思惟様式、思考態度の面から把握していることにある。

政治学者、政治思想家であった丸山の近代精神論の特質は、政治的思惟を近代的思惟の本質をなすもの、必要不可欠の要素として位置づけていることにある。丸山は近代精神の特質をとりわけ主体的作為の精神にみている。政治思想史の視点からみると、中世から近代への歴史的变化において生じたもっとも重要なこと

は、社会秩序を自然秩序、自然的所与とみなすような社会観から、社会秩序を人間が主体的に形成すべき人為的秩序とみなす社会観へ変化していったということにある。その意味において政治社会を人間が自らの意思によって形成したものとみなす社会契約説は、近代政治思想の核心をなす思想とみなされる<sup>(4)</sup>。

丸山が戦後の日本において確立されねばならないものと考えた近代的人間とはとりわけ政治社会の主体となりうる人間のことであった。政治社会あるいは国家の主体となりうる人間は、丸山においても、その前提としてまづ一個人として自立していなければならなかった。福沢のいう「一身独立して一国独立す」であり、普遍的原理によって自らの内面を規律しうる人間こそがまた普遍的原理にもとづく国家秩序の主体となりうるのである。この普遍的原理による内面的人格性の確立ということを重視する点において、丸山は大塚ら他の「近代主義者」と全く考えを同じくしている。しかし政治社会の主体としての人間は、内面的人格性の確立とは別に、それとは容易に調和しがたい他の思考態度をもつことを要求されるのである。すなわち政治社会の主体としての人間は、内面的に自立すると同時に、内面に閉じこもるのではなく、外面的世界＝社会に対する関心を持ち社会にむかって積極的に働きかけていく能動的態度を要求される。そしてまた政治的社会的問題について判断するためには、私的な人間関係における道徳や宗教的な倫理とは性質を異にする尺度や原理をもつことが必要である。しかし政治社会の主体に要求される思考態度とはこれだけではない。丸山は政治的思惟は「現実的思惟」でなければならぬと考えていた。いいかえれば、何らかの超越的原理を天下り式に適用し、原理によって現実を裁断するような思考態度は何ら政治的思

考とはいえないのである。政治的思惟は具体的で客観的な現実認識にもとづくものでなければならない。丸山は政治の本来的課題は紛争の解決であるという<sup>(5)</sup>。現実の社会は多様な個性と価値観と利害関係をもった人間の集合体であり、紛争の発生はむしろ社会の常態である。この不可避的に生じる紛争を、いかに公正にそして犠牲を最小限にして解決するかということが政治の問題である。そのためには、具体的現実そのものを客観的に把握する態度—現実に対して距離をおいてみるとらわれぬ態度が必要である。具体的現実そのものに即してそれを可能な限り客観的に把握し、そしてその現実認識にもとづいて問題の解決を探っていくという経験的な思考態度が必要となる。それゆえ、政治的思惟は近代精神の特質をなす超越的普遍的原理の内面化、「われここに立つ」という態度と—矛盾するわけではないにしても—容易に調和しがたい思考態度を内包している。もちろん、現実的思惟としての政治的思惟は現実追隨的態度や機会主義的態度であってはならず、それは常に原理や規範にてらして考える思考態度でもなければならないと丸山はいう。しかしそのためには、原理の妥当性を具体的状況のなかで吟味しなおしていくとともに、また逆に、具体的状況そのもののなかから原理原則を再構成していく態度が必要である。それは原理と現実との一方だけに偏するのではなく、自己の精神の内部にこの両者をひとしく共在させ、精神内部で両者の往復運動を行っていくような態度である。それは強靱にして柔軟な真に成熟した精神態度にしてはじめて可能なことである。丸山が〈近代的思惟〉という言葉のもとに考え、そして例えば福沢にその典型を見出した精神態度はこのようなものであった。丸山における近代精神とはこのような形のものであり、そしてこの

ような精神によってこそ戦後日本の民主化、民主主義の実現ははじめて可能となると彼は考えたのである。

【註】

- (1) 日高六郎編『現代日本思想大系34・近代主義』(1964年 筑摩書房) 8頁。
- (2) 『丸山真男集』第十二巻(岩波書店)、93-94頁。
- (3) 笹倉秀夫『丸山真男論ノート』(1988年 みすず書房) 326頁。
- (4) 福田歓一『近代政治原理成立史序説』(1971年 岩波書店)の第2部「政治哲学としての社会契約説」を参照。
- (5) 『丸山真男集』第五巻の「政治の世界」を参照。